

# 群馬の未来に大学ができること

—— まち・ひと・しごと・女性・未来という5つの視座 ——

安 齋 徹

What the University Can Do for the Future of Gunma;  
Five Viewpoints of Regional Vitalization, Human Resource Development, Employment  
Promotion, Women Empowerment and Policy Recommendations for the Future

Toru ANZAI

## はじめに

大学は社会的存在であり、社会によって期待される様々な役割を担っている（片岡・田村、1980：3）。筆者はもともと企業に勤務し、営業・企画・事務・海外・秘書・人事・研修など国内外で多彩なビジネス経験を28年間にわたり積んでいたが、閉塞感漂う社会や企業に少しでも風穴を開けられるような元気と勇気のある人材を育成したいと一念発起し教育界に身を投じた。働きながら大学院に通い、修士（社会デザイン学）・博士（学術）の学位を取得する中、縁あって2012年から6年間、群馬県立女子大学に奉職し、その間、地域における大学のあり方を常に模索しながら試行錯誤を繰り返してきた。本稿ではこの6年間にわたる教育実績を手掛かりに、群馬の未来に大学ができることとして群馬県の総合計画も参照しつつ、「まち」「ひと」「しごと」「女性」「未来」という5つの視座を提示したい。

## 1. 群馬の未来を創生する「はばたけ群馬プランⅡ」

群馬県は2016年3月に、第15次総合計画「はばたけ群馬プランⅡ」（以下、「はばたけ群馬プラン」）を策定した。同プランでは「限りない可能性を大きくはばたかせ、群馬の未来を創生する」を基本理念として掲げ、「地域を支え、経済・社会活動を支える人づくり」「誰もが安全で安心できる暮らしづくり」「恵まれた立地条件を活かした産業活力の向上・産業基盤づくり」とい3つの基本目標を従前のプランから継承した（群馬県、2016：36）。

最重要の課題は人口減少である。1960年代の高度経済成長期からほぼ一貫して増加し続けた群馬県の人口は、2004年の203万5千人をピークに減少に転じ、2040年には163万人、2060年には128万人にまで加速度的に減少していくと見込まれている。また人口が減少するだけでなく、現役世代や子供の数が大きく減少する一方で高齢者は増加し、人口構成が大きく変化していくことが予想されている。こうした人口減少と人口構成の変化は県民生活に様々なインパクトを与えることが懸念されており、人口減少の克服のために、若者の結婚・出産・子育ての希望を実現し、群馬に人を呼び込む流れを創出することが期待されている。そこで「群馬で暮らし始めたい」「群馬に住み続けたい」「群馬で家族を増やしたい」という3つの視点を掲げている。煎じ詰めると「魅力あふれる群馬」を実現することが、群馬の未来創生の要諦である（群馬県、2016：18-35）。

## 2. 群馬県立女子大学の設立経緯と存在意義

群馬県における女子の進学率の伸びが緩慢であったことに加え、進学者の大部分が県外に進学していたという実態から、地元女子大学を設置して欲しいという要望が高まり、1980年に群馬県立女子大学が設立された。当初は文学部だけの大学であったが、国際社会に対応しうる有能な女性の育成という建学の理念を推し進め、特色豊かな大学への改革と群馬県の発展にも資する大学として機能することを目指して、2005年に国際コミュニケーション学部も設置され2学部構成の大学となった（群馬県立女子大学のHPより）。

群馬県立女子大学は、広く知識を授け、深く専門の学芸を教授研究すると共に、家庭生活の向上及び地域社会における文化の進展に寄与し、更に国際化社会に対応し得る広い教養と豊かな情操を備えた人材を育成することを目的としている。文学部と国際コミュニケーション学部の2つの学部からなり、文学部は、人間が築き上げてきた言葉、文化及び芸術に対する幅広い知識及び深い洞察力を身につけ、柔軟な発想力、応用力及び問題解決力を持った有能な人材を育成することを目的にしており、国文学科、英米文化学科、美学美術史学科、総合教養学科の4つの学科がある。国際コミュニケーション学部は、実践的な英語力、高度なコミュニケーション能力並びに国際社会で自立して活躍するために必要な知識及びリーダーシップを備えた人材を育成することを目的としており、英語コミュニケーション課程、国際ビジネス課程の2つの課程がある（群馬県立女子大学のHPより）。

群馬県立女子大学を巡る動向として2点を指摘しておきたい。第1に大学の機能変化である。かつて大学は、教育と研究を目的とした機関であると捉えられていたが、今や地域連携活動は、教育や研究と学ぶ大学の基本的機能の1つであると認識されている。2002年に公立大学協会は「知の三角形—教育・研究も含めたトータルとしての新たな地域貢献—」という概念を打ち出し、①知の創造（学術研究：国内外に通用する普遍的な真理の探究）、②知の継承（高等教育：専門知識を有し、社会に広く通用する人材の育成）、③知の活用（地域貢献：地域に生まれ、地域に役立つ活動）の3つを提唱した（公立大学協会、2002：5）。

第2に公立女子大学の稀少性である。戦後、女子大学の数は女子教育の充実の波に乗り飛躍的に伸長し、1948年には5大学であったものが、1950年には30大学、1960年には37大学、1970年には82大学、1980年には88大学、1990年には90大学となり、1998年にはピークの98大学になった。その後、少子化の進行に伴い共学の方が学生を集めやすいという見立てが強まり、女子大学の共学化や統廃合が進行した。2000年には96大学、2010年には79大学となり、2018年現在、全国には77の女子大学がある。公立大学に限ると、1949年に大阪、高知、熊本で初めて公立女子大学が設立され、1980年から1986年のピークには7つの公立女子大学があった。因みに1980年設立の群馬県立女子大学は最後発の公立女子大学である。公立大学においても共学化の波が押し寄せ、2000年には5大学になり、2011年以降は福岡女子大学と群馬県立女子大学の2大学となった。つまり、国立のお茶の水女子大学、奈良女子大学と合わせ、現在日本に国公立の女子大学は4大学しかなく、2つしかない公立女子大学の1つが群馬県立女子大学である（武庫川女子大学教育研究所、2018）。

大きな政策課題が「地方創生」と「女性の活躍推進」である今、稀少な公立女子大学であるという特質を活かし、「知の三角形—教育・研究も含めたトータルとしての地域貢献—」という機能を最大限に発揮し「群馬の未来に大学ができること」を果たしていくべきであるというのが筆者の基本スタンスである。以下、「はばたけ群馬プラン」に掲げられた具体的な政策に即しながら、筆者が群馬県立女子大学の授業やゼミナールで実践した事例を述べていく。

### 3. まち～地域との連携～

「はばたけ群馬プラン」の政策9では「地域住民がともに助け合う「地域力」強化」を掲げている。地域住民がお互いに助け合い、地域の課題を自主的に解決する力を強化し、人口減少下でも持続可能な地域をつくるのが政策目標である（群馬県、2016：92）。

地域と連携し、学生は地域の課題解決に積極的に取り組んできた。

#### (1) 富岡学講座

世界遺産登録された富岡製糸場のある富岡市では、名所や史跡、歴史や文化、更には自然史や教育、市の現状と課題など、多面的な視点で富岡について学び、富岡の魅力を広め、地域の活性化のために取り組むことができる人材を育成するために2013年11月に富岡学講座を開講した。2014年に富岡学講座の一コマとして、「社会デザイン論」の授業と安齋ゼミナールで「富岡を若い人にアピールするには」という課題に取り組み発表した。

2014年5月に富岡市から「富岡の概要と魅力」「富岡の課題～広報戦略の観点から～」を受講し、6月に富岡市の視察ツアーを実施した。10月に富岡学講座の受講生約30名を前に学生が発表を行った。提案内容は、①宿泊施設がない、若者が来ない、移動手段がない（電車は高い）という問題点を踏まえ、終電で行って始発で帰る「夏の真夜中ツアー～Midnight in TOMIOKA～」、②シャッター通りの元気がないという問題点を踏まえたB級グルメグランプリの開催、③妙義の自然を活用したアドベンチャーツアーや富岡製糸場のライトアップ、スマートフォン対応の情報ツールの整備、④小さい頃に自然史博物館で夜に遊ぶという強烈な経験をすることで、大きくなった時に再訪を促す「自然史博物館でナイト・ミュージアム」というプランであった。受講した市民や富岡市の職員からは「学生らしい発想が新鮮であった」という感想が寄せられた。



#### (2) 道の駅「玉村宿」女子大プロジェクト

地域と協働し共生する大学として2011年に群馬県立女子大学は玉村町と包括協定を締結し、まちづくり全般にわたり相互交流を進めている。2015年5月に群馬県玉村町に道の駅「玉村宿」が開設されたことを契機に、「ビジネス・リーダー論」の授業と安齋ゼミナールで新たにオープンした道の駅を盛り上げるイベントを企画し、実行した。

2015年5～6月に玉村町や道の駅「玉村宿」による講義を受講し理解を深め、6月に玉村ツアーを行い、実際に道の駅や街の名所を見聞しながら地域の魅力を確認した。7～11月にかけてチェック・ポイント・ミーティングを繰り返し、周到に事前準備を進めた。11月本番には①道の駅「玉村宿」のグルメNo.1を決定するコンテスト、②女子大生が考えた、地元の食材をふんだんに使用した

ヘルシーなレディースランチの販売、③玉村町の観光や行事の魅力を伝える「We Love TAMAMURA」イベント、④玉村町が保有するエコな電動バスの試乗会、という4つのイベントを同時開催し、大いに盛り上がった。

国土交通省関東地方整備局が2016年3月に開催した全国初の「道の駅と大学連携成果発表交流会」では、群馬県の大学として唯一発表の機会を頂いた。

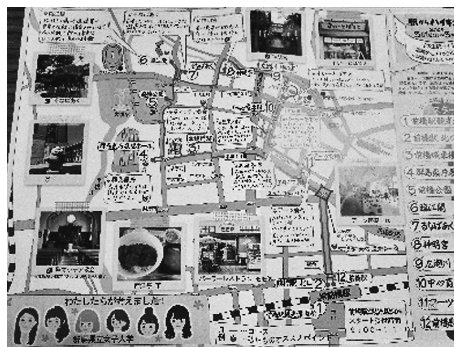


### (3) JR 東日本「学生が考えた駅からハイキング」

2017年の「ビジネス・リーダー論」の授業では、前橋市産業経済部にぎわい商業課と公益財団法人前橋観光コンベンション協会と連携し、中心市街地の活性化も念頭に「駅からハイキング」コースの企画に挑戦した。

2017年5月に前橋市と前橋観光コンベンション協会の職員の方々から「前橋市中心市街地の現状」や「観光を取り巻く現状と“駅からハイキング”プラン」の講義を受け、6月に「前橋ツアー」を実施し、7月に企画発表会を開催した。その後、有志の学生からなる「駅からハイキング」プロジェクト・チームを組成し、前橋観光コンベンション協会と連携して、前橋公園、るなばあくやアーツ前橋を巡る街歩きコースを決定し、親しみやすいMAPを作成した。

学生の取り組みは、2018年2月27日に放映されたNHK「ほっとぐんま640」で「きらりふるさと前橋の魅力歩いて再発見」として取り上げられた。3月にJR 東日本「学生が考えた駅からハイキング」として「前橋のことはそれほど、とは言わせないレトロな街歩き」を実施し、県内外から3日間で延べ約170名の参加者があった。



#### 4. ひと～女子大学における人材育成～

「はばたけ群馬プラン」の政策1では「群馬の未来を担う子ども・若者の育成」を掲げている。無限の可能性を持つ子ども・若者を、未来の経済・社会を担う人材として育成することが政策目標である（群馬県、2016：48）。

未来を切り拓く人材を育成することが大学の使命であると確信し、創意工夫を凝らして人材育成に取り組んできた（安齋、2017a：76-96）。

##### (1) 教育の全体像と成果

筆者は群馬県立女子大学で、コミュニケーション教育、リーダーシップ教育、キャリア教育、ビジネス教育、社会デザイン教育並びにゼミナール教育に関わってきた（図表1）。

図表1 筆者が関わってきた科目群

1年次	2年次	3年次	3～4年次
コミュニケーション科目	リーダーシップ科目 ビジネス科目	社会デザイン科目 キャリア科目	ゼミナール

出典：安齋徹、2017年、「女子大学における人材育成の取組み～「未来人材育成モデル」構築の試み～」、『NWEC実践研究』第7号、P.80、国立女性教育会館

教育の手法として共通していたのは、第1に知識を一方的に伝授する講義型の授業ではなく、参加型・双方向型のアクティブ・ラーニングを展開していたこと、第2に授業外でも小レポートやグループワークなど様々な課題を課し相当の勉強時間がかかる仕掛けを施していたこと、第3に毎回席替えし、初対面のペアでのディスカッションを繰り返していたこと、第4にリアルな題材や視聴覚教材を活用し飽きのこない新鮮な授業を心掛けていたこと、第5に自分と向き合うことや自分で考えることを志向していたこと、であった。

集大成となるゼミナールでは先進的な教育を志向し、「日本一のゼミを目指そう！」というビジョンを掲げ、「社会を変える、ビジネスを創る、自分を磨く」ことを目標に、思考力と行動力と創造力を身につけながら、これからの社会やビジネスを如何にデザインするかを探求してきた。机上での勉強にとどまらず、地域の課題と向き合い、学外コンテストにも積極的に挑戦してきた。その結果、本稿各所に記載の案件も含め、大学生観光まちづくりコンテスト4年連続入賞、JFN学生ラジオCMコンテスト3年連続入賞、学生ビジネスプランコンテスト3年連続入賞、学生起業家選手権で東京イノベーション賞受賞（2014年）、玉村町への「ゆるキャラ活用法」の提案（2014



年)、「群馬県立図書館の更なる活性化策」の提言(2015年)、「大学生が小学生を案内する英語も学べる玉村ツアー」の企画・実行(2016年)、日本遺産「かかあ天下一群馬の絹物語」魅力発信企画学生コンペティション優秀賞(2016年)、住友理工学生小論文アワード最優秀賞次席(2017年)など短期間に傑出した成果を収めることができた。

## (2) 人材育成のフレームワーク

授業及びゼミナールを通じて人材育成に取り組み、確かな手応えを感じてきたが、全体を貫く人材育成のフレームワークを構築し「未来人材育成モデル」と命名した。

大きく、「能力・スキル」「視野・ビジョン」「経験・タスク」に分類し、第1にコミュニケーション・リーダーシップ・クリエイティビティというベーシックな能力・スキルを習得する。第2に自分・ビジネス・社会に関する未来に向けた視野・ビジョンを身につける。第3に協働経験・企画経験・失敗経験というような経験値を積み重ねる(図表2)。

図表2 未来人材育成モデル

<p>(1) ベーシックな能力・スキル→協調力・創造力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション</li> <li>・リーダーシップ</li> <li>・クリエイティビティ</li> </ul> <p>(2) 未来に向けた視野・ビジョン→思考力・構想力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分：自己理解→自己鍛錬</li> <li>・ビジネス：動向把握→ビジネス創造</li> <li>・社会：課題認識→社会変革</li> </ul> <p>(3) 行動・挑戦する経験・タスク→行動力・実行力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協働経験：チームワーク・コラボレーション</li> <li>・企画経験：プランニング・共創</li> <li>・失敗経験：ストレッチ・タフネス</li> </ul>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

出典：安齋徹、2017年、「女子大学における人材育成の取組み～「未来人材育成モデル」構築の試み～」、『NWEC 実践研究』第7号、P.87、国立女性教育会館

飛行機に例えるならば、「エンジン」としての知識だけでは、飛び立つことができない(行き先もわからず、浮遊力もなく、進む力もない)。そこで、「操縦桿」を操る視野・ビジョン(自分・ビジネス・社会)を身につけ自ら行き先を見定め、「翼」としてのスキル・能力(コミュニケーション・リーダーシップ・クリエイティビティ)でより高く、速く飛べ、「推進力」となる経験・タスク(協働経験・企画経験・失敗経験)を積み重ねることで実際に前に進むことが可能となる。

## (3) 対外的な発信

女子大学における人材育成に向けた取り組みは、地元紙はもとより全国メディアでも注目を集め、『大学の約束2015-2016』(リクルート、2015:170-171)、『高校生の保護者のためのキャリアガイダンス2017』(リクルート、2017:22-23)などで取り上げられた。

アカデミックな発信も行っており、学会発表(日本ビジネス実務学会の全国大会、2016年6月「ゼミナール教育の持つ人材育成機能の探究」、2017年6月「女子大学における人材育成の取り組み」)に加え、日本女子大学現代キャリア研究所(安齋、2013:57-72)、実践女子学園下田歌子研究所(安齋、2015:107-127)(安齋、2016:52-77)、国立女性教育会館(安齋、2017a:76-96)などで論文を発表してきた。6年間の教育の成果をまとめた『女性の未来に大学ができること～大学

における人材育成の新天地〜』(樹村房) という著書も2018年5月に上梓した。

## 5. しごと～就職促進と産業振興～

「はばたけ群馬プラン」の政策10では「群馬の未来を見据えた経済・雇用戦略の展開」を掲げている。海外活力の取り込み、成長産業の創出・育成や交流拠点の整備などを通じて、経済の活性化と雇用の確保を図り、にぎわいと活力にあふれた群馬づくりを進めることが政策目標である(群馬県、2016:98)。

筆者は2016年4月から2年間務めた群馬県立女子大学キャリアセンター副センター長(センター長は学長)として2017年11月には群馬県庁や上毛新聞社を巻き込んだ県内就職の魅力発信イベント「群馬で働こう!」を開催した。この取り組みをきっかけに、次年度以降に県内の他大学でも同様のイベントが展開されることになった。

また群馬県では、オール群馬で人口減少対策に取り組む機運を醸成するために毎年「群馬の未来創生フォーラム」を開催している。安齋ゼミナールの学生は、若者の県内就職・県内定着を念頭に「ぐんまで働こう!」というテーマが設定された2018年2月開催のフォーラムに登壇し、「県外出身者の私達が県女の学びを通じて気づいたこと～群馬の魅力と群馬就職への期待～」と題した発表を行い、好評を博した。地域の魅力を知ることが群馬で働く志につながるという発表の内容は2018年3月4日の上毛新聞でも紹介された(上毛新聞、2018:6)。



更に「はばたけ群馬プラン」の政策11では「群馬の産業の強みを活かす戦略」を掲げている。第一次から第三次産業まで、本県ならではの各産業の強みと特性を活かした産業振興を進め、経済の活性化と雇用の創出を目指すことが政策目標である(群馬県、2016:104)。

学生は学外のコンテスト等を通じて、産業振興につながるアイデアを創出してきた。

### (1) 地域の食材を使用したハンドメイド化粧品

2015年度の「NRI学生小論文コンテスト」(主催:野村総合研究所)では安齋ゼミナールの学生が「MAKE UP JAPAN～化粧のチカラで日本を元気に～」という論文で奨励賞を受賞した。

「地域の食材を使用したハンドメイド化粧品」を高齢者が、知恵を活かし、地元の食材を使用した化粧品を作り、商店街の化粧品店で販売する提案であった。群馬県は農業が盛んで四季に応じた野菜や果物を楽しめる一方で、形などの見た目が悪いというだけで廃棄されてしまう規格外野菜・果物が多くあり、それらの食材も活用する。人生経験が深く、知恵と経験にあふれている高齢者は地域の宝であり、活躍できる場所さえあれば高齢者に新たな生きがいを創出し、高齢者が輝ける社会をつくることができると考えた。

**(2) 温度差発電技術を活用した握ると光るキーホルダー**

経済のグローバル化の進展により競争が激化する中で競争優位に立つためには製品の付加価値化を図る必要があるが、中小企業ではそうした展開が容易ではない。全国には、卓越した製造技術を有しながらコアとなる知的財産や商品アイデアを持たない中小企業が多数存在する一方で、ニーズに基づき発想されたにもかかわらず市場規模が小さいと判断されること等により商品化されない特許を保有する大企業も多い。

前橋市では富士通が持つ開放特許と前橋市内の企業が持つ技術を融合させる独創的、画期的な商品・ビジネスプランのアイデアを考案する「まえばし企業魅力発掘プロジェクト」(主催：前橋市、協力：群馬銀行)を2016年度に開催し、安齋ゼミナールの温度差発電技術を活用した握ると光るキーホルダー「ホタルノヒカリ。」というプランが最優秀賞を受賞した。その後、前橋市の仲介で雑貨を販売する前橋市内の企業と意見交換を行い、ファッション性と機能性と経済性という市場ニーズを充足し、商品企画の方向性として面白いとの評価を頂いた。

**(3) 新感覚の古民家カフェによる地域リノベーション**

2017年度の第16回ビジネスアイデアコンテスト(主催：高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター)では安齋ゼミナールの学生が「上信電鉄沿線の未来に資するビジネス・アイデア」という課題に挑んだ。

経営学のマーケティング戦略に基づき、フィールド調査やポジショニングマップによる分析などを踏まえ「新感覚の古民家カフェ“こねきち”が地域をリノベーションする」というプランを立案し、プレゼンテーション審査会で創意工夫を凝らした発表を行った結果、特に優れた作品に授与される学長賞を受賞した。下仁田の食材である蒟蒻と葱をタピオカとアヒージョという若者目線のメニューと結び付け、また地域の課題である空き家を活用したアイデアであることが評価された。





## 6. 女性～女性の活躍推進～

「はばたけ群馬プラン」の政策5では「多様な人材の活躍応援」を掲げている。県内の多様な人材が、性別や年齢、障害の有無、国籍などにとらわれず、意欲や能力を発揮し、活躍できる社会づくりを進めることが政策目標である（群馬県、2016：68）。

女性の活躍を推進するには、社会や企業での啓発や実践のみならず、教育現場での取り組みも重要であり、とりわけ女子大学が学内外で果たすべき役割は大きいと考えている。

### (1) 女性活躍大応援団

筆者は2015年度から「ぐんま女性活躍大応援団実行委員会」「女性ネットワーク会議」などのアドバイザーを務めてきた。「ぐんま女性活躍大応援団」では、地域のあらゆる分野の団体や企業に応援団として登録してもらい、各々が女性の活躍を応援するメッセージを県のホームページを通じて公表している。「ぐんま女性ネットワーク会議」は、異なる業種・業態で活躍する女性を構成員として、参加者の資質向上と交流の機会を提供することで、企業や地域のリーダーを育成してきた。

### (2) 女性のエンパワーメント

地域の様々な分野で活躍する女性をエンパワーすることも大学の重要な責務である。筆者は、2016年9月「子育て中の方のための再就職応援セミナー」（主催：前橋市・前橋公共職業安定所）、2016年10月～2017年1月「キャリア支援セミナー：女性のためのハッピーキャリア大研究」（主催：ぐんま男女共同参画センター）、2016年11月～12月「女性のチャレンジ支援講座：想いを伝えるコミュニケーション力」（主催：前橋市男女共同参画センター）、2017年9月～11月「はっぴーきゃりあ スキルアップ・セミナー～周囲も貴女もハッピーになれるコミュニケーション術～」[はっぴーきゃりあ スキルアップ・セミナー～創造力がメキメキ伸びるしかくい頭をまるくする方法～]（主催：渋川市・ぐんま男女共同参画センター、後援：榛東村・吉岡町）、などの講師を積極的に務め、地域女性の能力向上に些かなりとも寄与してきた。

### (3) 社会人と学生の交流

社会人と学生が交流する機会も創出した。2016年6月に金融、建設、運輸など大手企業の県内支店で働く女性有志でつくる異業種ネットワーク「チーム花まゆ」と安齋ゼミナールでワークショップを開催し、働くことの意義や仕事のやりがいについて活発な意見交換を行った。2016年7月には日本政策金融公庫前橋支店・高崎支店と安齋ゼミナールで女性活躍推進について考えるワークショップを開催し、社会で活躍中の女性とゼミの学生が「働くってなんだろう？」というテーマの下、広くワーク・ライフ・バランスについて意見交換を行った。

## 7. 未来～政策提言～

「はばたけ群馬プラン」の政策13では「群馬の基盤を支える社会基盤づくり」を掲げている。県民の生活の基礎となる社会基盤づくりを通じて、経済の活性化や人・モノ・情報の対流を県土全体に波及させるとともに、県民生活の利便性や快適性の向上を図ることが政策目標である（群馬県、2016：116）。

社会基盤づくりに向けた政策提言となりうる斬新なアイデアも学生は考案してきた。

**(1) 高齢者宅による学童保育**

2014年の「NRI 学生小論文コンテスト」(主催：野村総合研究所)では、安齋ゼミナールの学生が「小一の壁から小一の扉へ～高齢者宅による学童保育～」という論文で特別審査委員賞を受賞した(特別審査委員は池上彰氏(ジャーナリスト・東京工業大学教授)など)。

提案内容は、高齢者が小学生を子に持つ親の手助けをする「高齢者宅での学童保育」であった。高齢者にとっては、世の中に必要とされていることを実感できることによって新たな生きがい創出される。働く親にとっては、子供を大切にしながら自分のキャリアアップを図ることができ、今までは諦めていた両方を欲張る人生が実現できる。子供が小学校へ進学する際、今までは小1の壁(負担)と感じていた学校外の時間が、扉(希望)へと変化していく。

**(2) 観光地を巡る水素バス**

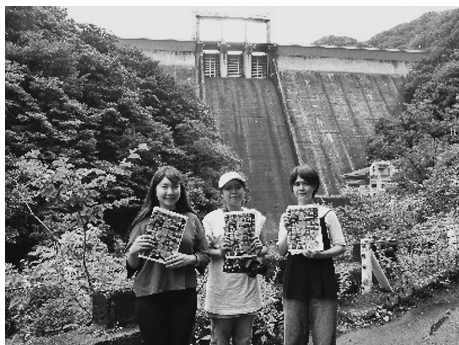
2016年に開催された「第14回学生ビジネスプランコンテスト」(主催：一般財団法人学生サポートセンター)において、安齋ゼミナールの学生が考案した「群馬シャトル～水素バスで便利なエコ旅♪」というプランが努力賞を受賞した。

群馬県には大きな2つの問題がある。第1に、自動車保有台数が第1位で、自動車から排出されるCO<sub>2</sub>が多いこと、第2に、県内には世界遺産登録された富岡製糸場のように有数の観光名所があるにもかかわらず、県内の公共交通機関が未発達で観光客の移動が困難なこと、である。そこで、次世代エネルギーとして注目を集める「水素」に着眼し、水素バスを利用して観光地を繋ぎ、観光客にも環境にも優しいシャトルバスを運行する。まずは高崎駅と富岡製糸場と伊香保温泉を先進的で快適な水素バスを定期的に運行することを想定し、次世代エネルギーの先進県というブランド価値の向上と外国人のインバウンド旅行客の拡大を目指すプランであった。

**(3) ダムを起爆剤にした地域活性化プラン**

2017年には安齋ゼミナールでダムを起爆剤にした地域活性化プランを考案した。2017年8月に国土交通省関東地方整備局利根川ダム統括管理事務所・水資源機構沼田総合管理所のご協力を賜り、矢木沢ダム・奈良俣ダム・藤原ダムを視察し、みなかみ町エコパーク推進課やみなかみ町観光協会にてヒアリングを行った。

「ダムっきゃない～みなかみユネスコ・エコパーク ダム・ディスティネーション・プラン」では、ユネスコ・エコパーク登録を契機に自然と人間の共生の象徴とも言えるダムに着目し、アクティビティ・グルメ・イベント・インフラに分類したダムに関わる様々な施策を考案し、「温泉」「アウトドア・スポーツ」に次ぐ第3の柱に「ダム」を位置付け、人口減少に悩むみなかみ町の観光振興を目指すプランを立案した。2017年9月には当時のみなかみ町長をはじめ町や観光協会、国



土交通省、水資源機構らの関係者を前に発表も行った。

## 8. 今後の課題

独自の信念から前例にとらわれず大学教育や地域連携の新境地を切り拓いてきたが、更なる展開に向けては多くの課題があることも認識している。

第1に地域連携活動の体系化・組織化である。地域には、教育、健康・医療、福祉、安全、環境、くらし・文化、産業・労働、社会基盤づくりなど様々な問題が横たわっている（群馬県、2016：15）。そうした課題に大学がしっかりと向き合っていくためには地域連携活動の体系化・組織化が必要である。但し、体系化・組織化を拙速に推し進めると機動性・独自性が失われる危険性もある。筆者は、担当する授業やゼミナールに応じて都度行政等と連携して案件を積み上げてきたが、学生の人材育成効果を最も重んじており、難易度や時間的制約などを勘案し時には連携を断念する場合もある。教員の裁量権・自主性を確保し、連携案件の選定には時に慎重な対応も求められる。

第2に行政機関や企業・NPO、教育機関などとの広範なネットワーク構築である。上記の通り、様々な地域の課題を取り扱うためには県・市・町・村などの行政機関、企業や公益法人・NPO、大学などの教育機関との広範なネットワークを構築する必要がある。大学事務局にネットワークの良い、ハブとなる担当職員がいることが望ましい。

第3に教職員や学生の意識改革である。教育や研究に重きを置き、地域連携にはまだまだ消極的な教職員や学生が多いのが現状であり、一層の意識改革が求められる。

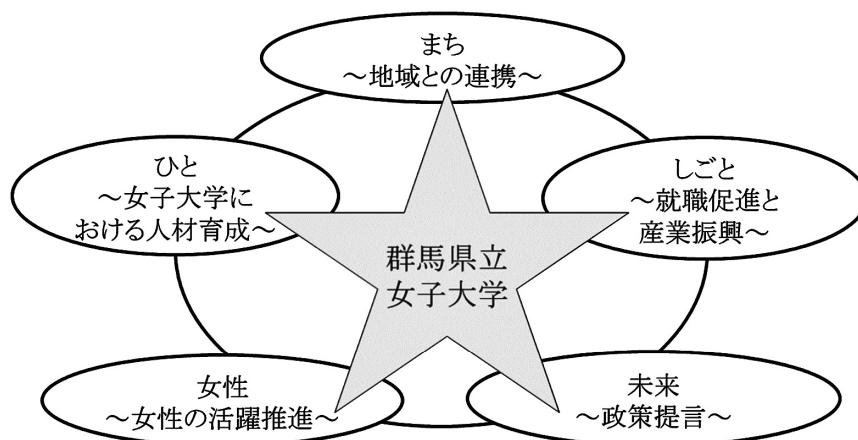
第4にPDCAサイクルの導入である。とはいえ、地域連携活動の効果測定方法には今のところ定見がないのが現状である。学生の人材育成効果に関して、筆者は独自に社会連携活動における成果測定方法を提案している（安齋、2017b：117-133）。

第5に地域連携活動に係る費用の負担である。地域連携活動は教員の手弁当や学生の自己負担に依存しているのが実態である。一定の地域連携活動については、せめて交通費などの実費相当だけでも大学の教育研究費などから支弁できる仕組みがあるとありがたい。

## おわりに

以上の通り、今後の展開に向けた課題はあるものの、「まち」「ひと」「しごと」「女性」「未来」という5つの視座から、「群馬の未来に大学ができること」は山ほどあるというのが本稿の主張である（図表3）。残念ながら、群馬県立女子大学を離れることになったが、2018年度には、群馬県「Gターン就職促進プロジェクト・チーム」座長を拝命した。今後とも機会のある限り、群馬の未来創生を微力ながら応援していく所存である。

繰り返しになるが、群馬県立女子大学は稀少な公立女子大学としての特質を活かし、「地方創生」や「女性の活躍推進」という政策課題と真摯に向き合い、「知の三角形―教育・研究も含めたトータルとしての地域貢献―」という機能を最大限に発揮していくべきである。群馬県立女子大学が、社会的存在としての意義を更新し続け、群馬の未来に多大な貢献をし続けていくことを心より祈念している。



図表3 群馬の未来に大学ができること (筆者作成)

## 【参考文献】

- 安齋徹、2013年、「女性リーダー育成に向けた大学教育の挑戦～女子大学における「ビジネス・リーダー論」という試み～」、『現代女性とキャリア』第5号、P.57-72、日本女子大学現代女性キャリア研究所
- 安齋徹、2015年、「女性の活躍推進に向けた大学教育の挑戦～女子大学におけるゼミナールを通じた人材育成の試み～」、『女性と文化』第1号、P.107-127、実践女子学園下田歌子研究所
- 安齋徹、2016年、「大学生のコミュニケーション力の現状と向上への取り組み～女子大学における「ビジネス・コミュニケーション」という試み～」、『女性と文化』第2号、P.52-77、実践女子学園下田歌子研究所年報
- 安齋徹、2017年 a、「女子大学における人材育成の取組み～「未来人材育成モデル」構築の試み～」、『NWECC 実践研究』第7号、P.76-96、国立女性教育会館
- 安齋徹、2017年 b、「大学生の社会デザイン力の向上～社会連携案件を通じた成果測定の試み～」、『Social Design Review』第8号、P.117-133、社会デザイン学会
- 安齋徹、2018年、『女性の未来に大学ができること～大学における人材育成の新境地～』、樹村房
- 片岡寛光・田村正勝、1980年、『大学の精神』、三修社
- 群馬県、2016年、「第15次群馬県総合計画 はばたけ群馬プランⅡ 平成28年度～平成33年度」
- 公立大学協会、2002年、「公立大学の地域貢献」
- 上毛新聞、2018年3月4日、「群馬で働き、未来を担う」、P.6
- 武庫川女子大学教育研究所、2018年、「女子大学の創立及び共学化についての基礎データ」
- リクルート、2015年、『大学の約束2015-2016』、リクルートホールディングス
- リクルート、2017年、『高校生の保護者のためのキャリアガイダンス2017』、リクルートホールディングス